

序章

◆新たな仕事

定例会議用の資料を複合機で出力しながら、篠崎香織はため息をついた。資料の形式は社内ルールに従った、片面2枚のカラー印刷だ。しかし、目の前のくたびれた複合機はすぐに紙切れを起こしてしまった。

A4のコピー用紙を探すが、見当たらない。文具置き場まで取りに行けばいいのだが、香織はちよつとズルをした。隣のモノクロプリンターのトレーを引き出し、コピー用紙を半分ほど頂戴する。

用紙を補充した複合機は再び動き出したが、4ページ目が姿を見せると、すぐに静かになった。今度はトナー切れだ。

(ついでないなあ)

どうもこのところ、運が無い気がする。

年度が変わって、今年で入社7年目。主任という肩書はついたものの、部下はいない。新製品の店頭プロモーションという仕事が好きではないが、作業の量は増え、責任ばかりが大きくなっていく。自分を取り巻く環境が変わっていく中、変わらない

のは黒髪ショートという髪型ぐらいのものだ。

その時、そばを通りかかった先輩から声がかかった。

「あ、篠崎さん、浜課長が探してたよ」

「はあい、わかりました」

「……気をつけてね」

ふたつ上の先輩の言葉に、香織はため息をついて、課長の席まで向かう。

席に課長の姿はなかった。メモを残そうと、課長の席の正面に回りこむ。

卓上カレンダーより高く積まれた書類の山、メールソフトを開いたままのパソコン画面、モニターに貼られた付箋ふせんには、社内システムのパスワードが書かれている。

（こんなので私より給料が高いなんて、なんだかおかしくない？）

香織は深くため息をついた。

自分の席よりタバコ部屋。メールは読まない返信しない。部下の手柄は自分の手柄。

先ほどの先輩の忠告通り、浜課長は気をつけなければいけない人物なのだ。

「おおう篠崎君！ いやあ探したよ！ なんだ、今日もズボンかネ。もう春だというのに、脚に自信が無いのかネ」

探していたのは自分だし、パンツスタイルは好みだし、脚に自信がどうこうなんてセクハラだ。
しかし、いちいち怒っていたらキリがない。

「浜課長、どういったご用件でしょうか」

「いや、またネ、ボクのアイデアが認められてだネ、新しい企画の立ち上げをネ、新しいプロジェクトで……」

「新企画の立ち上げですか？」

途中で話を切らないと、課長の話は無限ループに陥るのだ。

「まあ、そうだネ。休暇明けの八幡君……いや、八幡部長には少々重い仕事だからネ。手助けしないとならんからネ。早速第3会議室に行ってくれるかネ」

八幡部長が育児休暇から戻ったことは聞いていたが、なにか新しい企画を立ち上げたのだろうか。部長は実力で女性初の部長となった、女性社員にとっては憧れの人物だ。

（新企画ってなんだろう？）

香織は会議室へ向かった。

◆私がリーダー？

「失礼します」

会議室のドアを開けると、いつもは口の字に並べられている会議用の長机が、Iの字に並べられている。緊張しながら、香織は真ん中に座る八幡部長の正面に立った。

部長がゆっくりと立ち上がると、ショートボブの髪が光った。いわゆる〈天使の輪〉が輝いている。

「よく来てくれたね」

浜課長よりよっぽど男らしさを感じる言葉だ。香織は一礼し、部長が座るのを待ってから椅子に腰掛けた。

机の上にはZAINのロゴが描かれた段ボール箱がひとつ置かれているが、ここからでは中身は見えない。

「篠崎君、新製品のプロモーションはその後、どうかな？」

「はい、順調です。部長にもいろいろとお気遣い頂き、ありがとうございます」

部長はあごの前で手を組んだ。ピンクに塗った爪が視界に入る。見た目に手を抜かないというこだわりは、一児の母になっても変わらないようだ。

「篠崎君には期待しているからね……さて、今日の本題だけ」

香織は背筋を伸ばして、気持ちを本気モードに切り替える。

「この製品、知っているかな？」

部長が段ボール箱から取り出したのは、二足歩行の肉食恐竜、ティラノサウルスを模した紅いプラモデルだった。A4紙と同じくらいの大きさをした存在感のあるこのプラモデルを、ZAIN社の人間で知らないものはないだろう。

「『ダイノス』ですね！」

『ダイノス』はZAIN社の玩具の中でも、最もヒットしたシリーズのひとつだ。

「プラモデル事業は、バルカン社に押されてかなり厳しい状況だと聞いています」

その通り、と深くうなずいた部長は、自分の手元に視線を移した。

機体名

クリームゾン・レックス

所属

(旧)帝国軍

型式

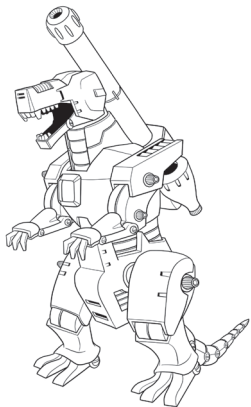
最終量産／全天候型

武装

重粒子砲×1

コロナ砲×1

高周波クロー×2



「こいつをね、君の手でよみがえらせて欲しい」

「私の手で……ですか？」

部長は香織の質問に目くばせで答えながら、話を進める。

「10月末に、年末の最重要製品として発売する。コンセプトもメインターゲットも新たに構築する。ブランド名だけは『ダイノス』ということだね」

（え？）

「この部屋をプロジェクトルームとして使ってくれたまえ。プロモーショングループには話を通してある。篠崎君には、このリメイク・プロジェクトのチームリーダーを務めてもらう」

（ええ？）

「他のメンバーも手配済みだ。まずは先代の『ダイノス』について勉強しておきたまえ。資料はその段ボール箱の中にある」

（えええ？）

香織は矢継ぎ早に浴びせられた部長の言葉を頭の中で繰り返した。

『『ダイノス』？ プロジェクトリーダー？ 10月末って、今が4月だから、あと半年？ リメイクって、ひとつのブランドをまるごと作り直すってことだよ？ でも、私が

チームリーダーだなんて……どうしよう、そんなの無理だよ」

呆然とする香織に、部長はパンフレットを手渡した。

『現場で使える フレームワーク仕事術 講師…神保武』

研修セミナーの案内らしいが、これがプロジェクトとどう関係するのか、香織にはわからなかった。

（フレームワークって、聞いたことはあるけど……なぜ、これ？）

パンフレットによると、予定は今日の18時からとなっている。

「篠崎君は、フレームワークについて知っているかな」

「聞いたことはありませんが、詳しい内容はわかりません」

「正直だね。では私の代わりに、そのセミナーに行ってみるといい。必ずこのプロジェクトに役立つ」

セミナーどころよりも、新プロジェクトのチームリーダーという職務をどうやって果たすのか、そもそも自分にそんな仕事ができるのか、香織は戸惑うばかりだった。